

Educational Program to Boost Students' Sense of Identification with their University : A Comparison of 2013 2015 Programs and Analysis of Talk of the Teachers Approach

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): promoting university identification, Talk of the Teachers, student familiarity with faculty, university student development, university satisfaction 作成者: Akira, OKUDA, Masahiro, KAWAKAMI, Hiroyuki, SAKATA, Yuko, SAKUTA, Saeko, KAWANO, Yasuyuki, KAWABATA メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4402

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



大学における全学科学生を対象とした帰属感情高揚プログラムの開発 —2013～2015年度プログラムの比較と「教員の対談」の分析—

学芸学部	心理学科	奥田 亮
学芸学部	心理学科	川上 正浩
学芸学部	心理学科	坂田 浩之
学芸学部	心理学科	佐久田祐子
学芸学部	被服学科	川野佐江子
健康栄養学部	健康栄養学科	川端 康之

要旨：筆者らはこれまで、大学における全学科学生を対象とした帰属感情高揚プログラムを開発してきた。本研究では、それまでのVTRを改善し、かつ受講生の所属する学科教員が登壇した2014年度以降のプログラムの方が、2013年度のプログラムに比べてより効果的であるかを再検証し、さらにその効果について「教員の対談」に注目して分析し検討することを目的とした。質問紙調査の結果、2014年度以降のプログラムの方が効果的であり、特に教員の対談の効果が高まっていることが示された。さらに教員の対談の狙いを語りの内容から分析したところ、①フランクに自身の学生時代を示すことで、受講生の教員に対する親近感を高める、②自身の体験を踏まえて、大学・学科に関して語りかけ、受講生の大学生活の内省と帰属意識を促す、③個としての成長の取り組みを示し、呼びかけることで、成長の場として今の大学生活への自己関与意識を高め、帰属感情につなげる、といった内容に分類され、受講者にとって親近性の高い教員がそれらの狙いに沿って語ることで、プログラムの効果が高まることが示唆された。

キーワード：大学への帰属感情高揚プログラム、教員の対談、教員と学生の親近性、大学における学生の成長、大学満足度

問題と目的

大学生活に対する充実感を感じるためには、学生の大学への帰属感情が高まることが重要である(佐久田・奥田・川上・坂田, 2008)。筆者らはまず、心理学科所属の1回生を対象にした帰属感情高揚プログラム(特別授業)を実施し、その効果を測定してきた(川上・坂田・佐久田・奥田, 2010, 2011)。その結果、大学生活に関して所属学科の先輩が語るVTR(同学科VTR)を呈示することと、複数教員による自身の学びに関する対談を組み合わせるプログラムにより、1回生の帰属感情が高揚することが示されている。

さらに筆者らは、このプログラムを特定学科に閉じたものとしておかず、大学全体に広げていくために、複数学科に所属する学生を対象にした全学的プログラムの開発を目指してきた。佐久田・奥田・川上・坂田(2014)では、大学内の複数学科の先輩が自らの学びについて語るVTR(同大学VTR)と心理学系教員の対談を組み合わせ、複数学科に所属する1回生を

対象にしたプログラム(2013年度)を実施したところ、同大学VTRも同学科VTRとほぼ同様の効果を持つが、先輩から1回生に向けてのメッセージVTRについては、同学科VTRの方がやる気を高めること、教員の対談については、評価が比較的高くないことが示されている。また、教員の対談については、教員と学生との親近性が低いことにより評価が高くないと解釈され、この点についてプログラムの改善が必要であることが示唆されている。

この結果を踏まえ、坂田・佐久田・奥田・川上(2015)では、上回生からのメッセージVTRのノイズを減らす、上回生が所属学科のお勧めポイントをコメントする内容を加える、対談者となる担当教員を受講生の所属学科の教員から選ぶといった工夫を行った上で、複数学科に所属する学生を対象に、同大学VTRと、複数学科の教員による対談を組み合わせ全学向け帰属感情高揚プログラム(2014年度)を実施し、その評価について吟味している。その結果、2014年度

プログラムは2013年度に比べ「教員の対談」に対する評価が全般的に高まり、またプログラム全体として「やる気」が高まるものであることが示唆されている。

そこで、本研究では、2014年度とほぼ同じ構成での全学向け帰属感情高揚プログラムを再度行い（2015年度）、2014年度以降のプログラムが2013年度の全学向け帰属感情高揚プログラムよりも効果的であるかどうかを再検証することを目的とする。また、もしそのような効果が得られた場合には、なぜそのような効果が得られたのかについても検討する。

その際に、以下の理由から、特に「教員の対談」の効果について検討を行う。すなわち、筆者らのこれまでの研究（坂田・佐久田・奥田・川上，2007；佐久田他，2008；佐久田・奥田・川上・坂田，2012）において、新入生対象の教育プログラムで、帰属感情の高揚と並んで教員との親密化を得られることが大学生活充実度を高める要因であることが明らかにされており、古田・中村・香月・加藤・田中・西河・福島・堀・向井・八城（2012）においても、教員が親しみやすい存在として人となりを積極的に学生に示し、直接的に学生同士の交流に関与するプログラムが新入生を円滑な大学適応へとつなげるために重要であることが示唆されているからである。また、教員との親密化や教員がソーシャル・キャピタルとして学生に認知されることが大学

生活充実度と関連している（芳賀・高野・羽生・坂本，2015）ことも「教員の対談」に注目する理由である。

方法

実施概要 大阪樟蔭女子大学の在学生のうち、1回生が多く受講している講義科目の1コマを用いて帰属感情高揚プログラムを実施した。2013年度は講義科目「樟蔭の窓」最終回にて、2014年度以降は講義科目「自己の探求」第14回授業にて実施した。いずれの科目も一般教養系科目であり、受講生は複数学科の1～4回生で構成されていた。

調査対象者 2013年度プログラムの参加者は40名（平均年齢18.74歳， $SD = .85$ ）、2014年度は62名（平均年齢19.35歳， $SD = .91$ ）、2015年度は42名（平均年齢19.60歳， $SD = 1.15$ ）であり、計144名を調査対象とした。対象者は大阪樟蔭女子大学の全学部学科1～4回生であり、その大半が1回生であった。

プログラム内容 2013年度のプログラム内容（佐久田他，2014）と2014年度以降のプログラム内容の基本構成は同じであるが、呈示するVTRと教員の対談（「教員トーク」）で登壇する教員の変更を行った。VTRに関しては、特に音声の聞き取りにくさに関して2013年度版プログラム受講生から指摘されていたことから、撮影時の雑音を極力排除しながら撮影を行っ

表1 2013年度版、2014年度以降版の帰属感情高揚プログラム比較

実施年度	2013年度	2014年度以降
プログラム構成 (VTR内容)	① 始まりの言葉・内容説明	始まりの言葉・内容説明
	② 学科の専門領域を学ぼうと思ったきっかけと印象変化VTR	学科の専門領域を学ぼうと思ったきっかけと印象変化VTR
	③ 樟蔭に来て良かったことVTR	樟蔭に来て良かったことVTR
	④ 一回生の今頃はどんな風に過ごしていたかVTR	一回生の今頃はどんな風に過ごしていたかVTR
	⑤ 学生生活の中で心に残っていることVTR	学生生活で楽しかったことVTR
	⑥ ゼミ風景VTR	学生生活の中で心に残っていることVTR
	⑦ 一回生へのメッセージVTR	学科のお勧めポイントVTR
	⑧ 教員トーク(教員と大学生生活, 等) *1	一回生へのメッセージVTR
	⑨ 質疑応答	教員トーク(教員と大学生生活, 等) *2
	⑩ 質問紙実施・感想記入	質疑応答
	⑪ -	質問紙実施・感想記入

*1：心理学系学科の教員3名が登壇した。

*2：授業担当者である心理学系学科教員1名を含む、複数学科教員3名または4名が登壇した。

た。VTR の内容に関しては、「学生生活で楽しかったことは？」という、今後の学生生活を受講生が前向きに捉えられるように意図された問いと、「所属学科のお勧めポイントは？」という学科帰属感を受講生に意識させるような問いを2014年度版で新たに追加したことが2013年度版との大きな相違点である。また、教員との親近性がプログラムの効果に影響を及ぼす可能性のあることから（佐久田他，2014）、2014年度以降は、プログラムを実施する授業の担当者および、受講生が所属する複数学科の教員に登壇を依頼した（表1）。

評価項目 プログラム内で呈示されるVTR及びプログラム内容の印象を評定する「誇り」「不安」「やる気」の3下位尺度（11項目、5件法）からなる尺度（川上他，2010）が用いられた。

手続き 帰属感プログラム終了後、プログラム内で呈示されたVTRを「一回生へのメッセージ」「その他」の2つに大きく分けて、それぞれの印象評定を求めた。また教員同士の対談についても「教員トーク」として同様に評定を求めた。評定後、VTRやプログラムについて感じたことを、自由に記述することを求めた。

結果と考察

2013年度プログラムと2014・2015年度プログラムの比較

2013年度プログラムと2014・2015年度プログラムの差を検討するため、各プログラム終了時に実施した調査データについて対応のないt検定を実施した。なお、2014年・2015年度プログラムの内容は同一であるため、同一プログラムに対する調査データとしてこれらをまとめ、2013年度データとの比較を行った。

「誇り」を従属変数とした場合、有意差が見られたのは「教員トーク」のみであり（ $t(141)=2.13, p<.05$ ）、2013年度よりも2014年度以降のプログラムにおける教員の対談のほうが受講者の誇りを高めることが明らかにされた（図1）。

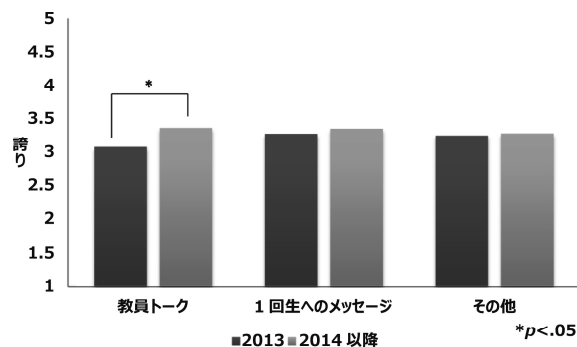


図1 2013年度プログラムと2014・2015年度プログラムの印象比較（「誇り」）

次に、「やる気」を従属変数として同様のt検定を行った。その結果、すべてのプログラム内容において有意差または有意傾向が認められ（教員トーク： $t(141)=2.92, p<.01$ 、一回生へのメッセージ： $t(141)=2.50, p<.05$ 、その他： $t(141)=1.88, p<.10$ ）、いずれも2014年度以降のプログラムのほうが受講生のやる気を高めることが明らかにされた（図2）。

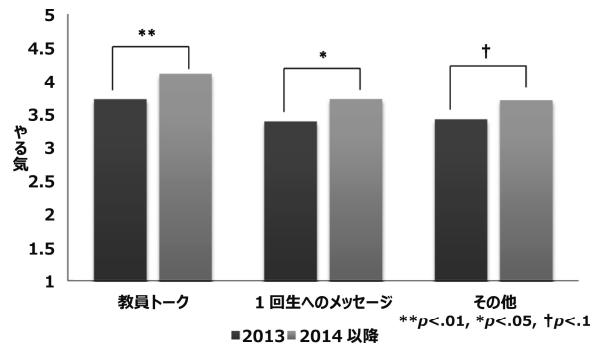


図2 2013年度プログラムと2014・2015年度プログラムの印象比較（「やる気」）

同様に「不安」を従属変数としてのt検定を行った。その結果、「教員トーク」のみで有意差が認められ（ $t(141)=3.44, p<.01$ ）、2013年度よりも2014年度以降のプログラムにおける教員の対談のほうが受講者の不安を緩和させることが明らかにされた（図3）。

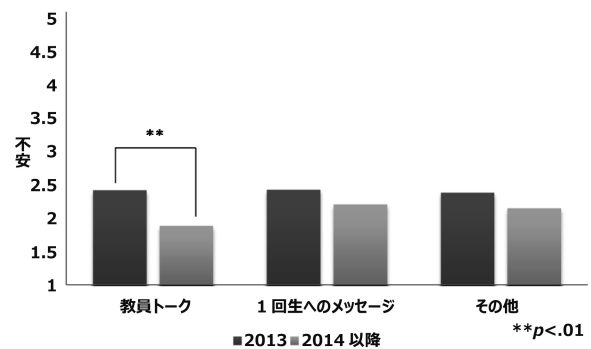


図3 2013年度プログラムと2014・2015年度プログラムの印象比較（「不安」）

以上より、2014年度以降版のプログラムで使用したVTRは受講生が今後の学生生活に対するやる気を高めること、また2014年度版以降のプログラムにおける教員の対談は受講生の不安を抑制し、やる気と誇りを高揚させることが示された。VTR内容については、各学科のお勧めポイントや学生生活での楽しさを追加したことが、受講生のやる気を高めることにつながったと考えられる。一方、これらが受講生の誇りを高めたり不安を軽減させたりすることにはつながらなかったことも示唆された。誇りや不安には2014年度以降に教員の対談の構成員を変更したことが影響して

おり、佐久田他（2014）が指摘しているように、事前の教員との親近性が高いほど、その対談内容が受講生に響きやすいということが言えるだろう。以上のことは、坂田他（2015）の知見の信頼性を示すものである。

「教員の対談」の分析

2014年度以降の教員の対談（「教員トーク」）が2013年度と比較して、やる気と誇りを高め不安を抑制するという全体的な効果が示された。そこで、帰属感情高揚プログラムにおいて、教員同士の対談のどのような点が効果を与えているのか、それらはプログラムや教員のどういった意図に反応した結果であるのか、について、より具体的に質的な観点から検討するため、教員の対談のプログラムとしての狙い・各教員の発言の意図と、受講生の反応（質問紙における自由記述）を比較して分析を行う。本研究では、2015年度の帰属感情プログラムにおける教員の対談を取り上げる。

2015年度は、司会1名と対談を行う教員3名が登壇した。方法で述べたように、2014年度以降は学生の親近性を考慮して、受講生の所属する学科教員と授

業担当者が登壇した。2015年度は授業に出席している学生の分布を鑑み、健康栄養学科、被服学科、授業担当である心理学科から、各1名の教員が教員の対談に参加し、授業担当である心理学科教員1名が司会進行を務めた。教員同士が対談する時間は、おおよそ30分間である。

教員の対談の元々の狙いは、プログラム前半に上回生がVTRで自らの大学生活をもとにした語りを示した後に、教員も同様に自身の学生時代をフランクな形で語ることで、受講生の教員に対する親近感を高めることである。同時に、教員が学生時代の体験を踏まえつつ、所属大学や学科、専門領域と学生らに対する思いを伝えることで、受講生が大学・学科で自分が過ごす日々思い巡らすようになり、そのことを通じて帰属意識を活性化させることも期待されている。

そのため、登壇する教員には、「プログラムによって受講生が教員らの等身大のありように親近感を持ち、大学・所属学科で過ごす大学生活について色々と積極的に考えるようになることを狙いとする」という主旨を事前に伝えているものの、ライブ感を重視して対談

表2 「教員の対談」におけるプログラムおよび教員の意図

プログラム「教員の対談」の狙い
教員自身の学生時代をフランクな形で語ることで、受講生の教員に対する親近感を高める。同時に、教員が学生時代の体験を踏まえつつ、大学や所属学科、専門領域と学生らに対する思いを伝えることで、学生らが大学・学科での日々を思い巡らし、帰属意識が活性化することを狙いとする。
教員の意図
<p>教員A(健康栄養学科)</p> <p>発言全体を通して、何か意図して伝えようというよりは、ありのまま、飾らず、質問に答えるよう心がけた。</p>
<p>教員B(被服学科)</p> <p>この授業のテーマが「大学への帰属意識」ということだったので、今通っている大学を「母校」と呼べるようなアイデンティティを構築して欲しいと言いたかった。また、その構築は、誰かに整えてもらえるものではなく、自らが動いて獲得できるものである、ということも意図していた。</p> <p>本学では、そもそもいわゆる受験勉強を経験して入学する学生は一部学部の学生であり、多くの学生は大学選びに大学のミッション、特徴や評価を意識することなく、偏差値、通いやすさ(被服学科では、専攻の学問領域の珍しさが大きな要素)などを優先して入学してくる。これは、在学生から本学の歴史や特異性(伝統校、お嬢様学校というような旧来の評価)を知らない、関心がない、という声を聞くことから窺える。これはもはや、大学選びに伝統や歴史は重要でないということかもしれない。ともかく、帰属意識はそこへの帰属にプライドが保てるのか、という点が重要である。これは、学生ひとりひとりの行動にかかっているのだ、ということをもっとも理解して欲しかった。</p> <p>ひとりひとりの行動とは具体的には、日常のマナーの問題であり、学問への真摯な態度である。とくに難しいことではないはずだが、緊張感のない学生生活ではなかなか実践できていない。校内でもプライベートな身体感覚で過ごすことが、どれだけ社会性を欠如している態度であるのかを理解して、パブリックな身体感覚を養い、自立した個を自ら養って欲しいと伝えたかった。そのことが、大学全体を誇りある場とさせ、帰属することの喜びになると考える。</p>
<p>教員C(心理学科)</p> <p>これまでの研究から、学生の大学に対する帰属感を高めたり、大学生生活充実度を高めたりするためには、「教員」と学生の親密化が大切であることがわかってきたため、学生が教員を身近な存在として感じてくれること、そしてそのために学生の興味をひくことを意図した。また「自己の探求」の担当教員でもあったことから、学生達の自己実現に対するモチベーションを高めたかった。</p>

の展開については特に打ち合わせることなく、本番に臨んでいる。

このようなプログラムとしての「教員の対談」の狙いがありつつ、各教員がそれをどのような形で具現化しようとしたのかを明示するため、プログラム終了後に教員が対談に登壇する中で全体としてどのような意

図をもって出演していたかについて内省し、記述した(表2)。さらに、撮影された「教員の対談」の逐語録を起こし、各教員が自らの発言を振り返って、具体的な発言にどのような意図が込められていたのかについても、同様にテキスト化した(表3-1~3)。

表2に見られるように、教員の対談の本来の主旨と

表3-1 「教員の対談」における具体的な発言とその意図(教員A)

No.	具体的な発言	意図していたこと
A1	大学時代で記憶にあるのは大学院に入ってからの方が記憶にあって、むしろあんまり大学時代の記憶はないんですね。	学部学生時代は、バイトばかりしていて、勉学には熱心でなかった。
A2	最近の学生さんの勉強内容を見ていて、健康栄養学科しかわかりませんが、勉強が体系立てられているなという印象があります。また、科目間で先生方が連携されて授業が行われる、そういうところが非常によくやられていると思います。我々が学生の頃は教授が適当に来て授業をする。ひどい先生は15回のうち3回しか来なくて、あとは助手の先生が話している。そういう先生もいらっしゃいました。	学習内容は、体系立てて整備されている。授業としてかなり準備されたものが提供されているという印象を持って欲しかった。
A3	帰属意識というお話があったんですけど、アメリカンフットボール部にいる時はですね、部員としてすごい帰属意識があったんです。辞めた途端、大学ってすごい大きな大学だったんで、大学の一員、という意識は全然なくなりました。でもここは小さいので健康栄養学科の学生さんは管理栄養や食物それぞれの中でイメージがとて強いのでその中でその一員として、その中で考えてもらったらいいと思います。	大学の一員との帰属意識は希薄でも、学科の一員、専攻の一員との帰属意識であれば、帰属意識をイメージしやすいのではないかと考えた。

表3-2 「教員の対談」における具体的な発言とその意図(教員B)

No.	具体的な発言	意図していたこと
B1	実際大学に入って授業に出たら好きで選んだのでとても面白かったですし、大学自体の選び方も行きたくて行ったというか、ブランドとかそういうのじゃなくて…	進学先の選択には、将来のことより何を学びたいかを優先し、それを自分で決めて選んだ、という自覚と自負があったことを伝えたかった。
B2	ひとりで居られる空間が大学時代はすごく楽しかったので、一人で喫茶店に行くとか、一人で入っちゃいけない屋上に行くとか、そういうのをやりました。	多くの女子が、集団行動を取ることで仲間との同一化への欲望を満足させる傾向にある。しかし私は、母校の学生として一人で過ごすことを経験し、そこで逆の欲求(差異化への欲望)を覚醒させた、という経験を述べたかった。それは母校へのアイデンティファイが、ある種の選民思想的なアイデンティファイとして過剰に反応していたということかもしれない、ということも含んでいる。過剰な自意識を発動させた「我が母校」だった。
B3	そこにいる一体感がものすごく好きで、大学自体も好きで入った大学だったので、そこにどっぷりつかって…	憧れて入学した大学に帰属している高揚感を大学生生活の全てを通して経験していた、ということも伝えたかった。そしてその経験が、社会に出た後の自分のより所にもなった、ということも付け加えたかった。
B4	アパレルは、その昔の、当時のイメージでいうとチャラかったんで、私の中でチャライ世界だったんで、就職活動の業界には入らなかったんですけど、たまたま、入りたかった会社の部門にそれがあって、そこに配属されてしまったんですね。	人生には自分の思いとは全く異なる場に身を置かなければならないこともあるが、無垢な状態でそこに入っていけば道は自ずから啓けるので、不安がることはない、自分で自分の許容量を制限してはいけない、ということも言いたかった。
B5	先生がたは皆さんがたひとりひとりとお話したいはずなので、皆さんも返してくれるのならね、コミュニケーションをね、とりたいたい。そのなかで学んでくれたらなと思っています。	人間関係構築には、それなりの“作法”が必要ということも伝えたかった。それを大学生活の中で獲得して欲しいと言いたかった。
B6	答えは出ないんだろうけど、考えていることが堂々巡り、気持良くもなるし、みたくもないことあって、悩んでいられる間は悩んでも良いのかなど…	自分の在り様を真剣に考えて欲しい、それが答えが出ず、考えることに酔っているような状態になっても、自分の生き方を人任せにしない人になってほしいという意図があった。ヒトは考えてこそ人になれる、と伝えたかった。

表 3-3 「教員の対談」における具体的な発言とその意図（教員 C）

No.	具体的な発言	意図していたこと
C1	<p>大学に入るまで僕は真面目にガリ勉強してたんですね、それこそメガネをかけて。…それで大学に入っていざ門に入ったら周り似たような子ばかりなんです。しかも大学って人数多いじゃないですか。当時同じ学科、学部の中で1学科60人ぐらいだったんですけどその中で「お前、あいつに似てるよな」って言われる人がいたんですよ。そっくりな双子みたいと言われる人がいたんですよ。でもね、その人は全然魅力的じゃなかったんです。「周りから見たら俺はこんな風に映っているのか」ってすごいショックだったんです。それで周りが似たような顔ばかりで「自分の個性ってなんやるか」って自信をなくして、自信を持つにはどうしたらいいんだろうかみたいなビジネスマン向けの自信の出る本とかいろいろやってみたんですけど、結構ね大学時代っていかに自分のキャラを作っていくかみたいな、自信を持つためにはどうしたらいいんだろうっていうことにごく取り組んできてですね…</p>	<p>大学生活前と大学生活以後のギャップの大きさを伝え注意をひこうとした。また、大学生のときには自信がなかったことを強調することで学生に教員を身近な存在として感じてもらおうとした。</p>
C2	<p>一つには当時20年ぐらい前になりますが先生があんまりちゃんと教えてくれなかった、今みたいに丁寧に教えてくれなかった。</p>	<p>今の大阪樟蔭女子大学の教育がいかに充実しているか、教員が丁寧に教育しているか（大阪樟蔭女子大学の良さ）を強調したかった。</p>
C3	<p>特にテニスサークルが一生懸命やってて、その中にはこの人いいなっていう、男性の中でこんな風になれたらないなっていう人がいたりして、自分にはこんないいところ無いよなっていうところがあって、なんとかその人に近づきたい、1学年100人いるような中でなんとか自分が埋もれずに過ごせたらなってことで、それまでメガネだったのをコンタクトレンズにしてみたり、そういうような努力をして過ごす感じです。</p>	<p>自分のキャラを確立し、自分を集団の中に位置づけるために馬鹿げたことも含め、涙ぐましいまでの努力をしたことを伝えることで、学生達に教員を身近に感じて欲しかったと同時に、変化・成長に向けて動機づけたかった。</p>
C4	<p>やっぱり、知識は持つといった方がやっぱり断然、良いと僕は思うので、ぜひ、僕はあまり学べなかったんですけど、大学で知識みたいなことも大切にして欲しいなとも思います。あとはそうですね先ほどね、人間関係、いかにキャラを作っていくということを話したんですけど、あのいま、アカデミックスキルズなどの授業があって、結構、コミュニケーションワークみたいな授業があって、そんな授業が増えてきている。あの一。カウンセリングね、僕え一つと20年ぐらいしているんですけど、最近になってよく思うのが、やっぱり、すごく心理学的に色々な専門的な知識、専門用語を積んでいくということも大事なんですけども、やっぱりベースになるのはすごい普通の人間関係、やはりコミュニケーションだと思うのです。普通、こうちゃんとしたコミュニケーションをとれるということは大事なことだと思うので、そういうところもぜひ、大学で学んで欲しい…</p>	<p>教員が、授業を通じて大阪樟蔭女子大学で何を身につけて欲しいと思っているか（期待・到達目標）を伝えたかった。</p>

しての「フランクに自身の学生時代を示し、親近感を高める」という狙い（これを「狙い①」とする）については、『ありのまま、飾らずに答えるよう心がける（教員 A）という態度や、『学生の興味をひく』ような語りをする（教員 C）を通じて実現することが意図されていた。また、「教員の体験を踏まえた大学・学科に関する語りかけが、受講生の大学生活の内省と帰属意識を促す」という狙い（「狙い②」とする）については、大学で『パブリックな身体感覚』と『自立した個を自ら養う』ことで、「母校」の誇り・アイデンティティを構築して欲しい、という内容を語りかけることによって（教員 B）具体化されていたと考えられる。

特に狙い②の中でも、個としての成長を呼びかけること（『アイデンティティの構築は、自らが動いて獲得できるもの』、『自立した個を自ら養う』教員 B、

『自己実現に対するモチベーションを高める』教員 C。ただしこれは「自己の探求」という授業担当者の立場からの意図）が、教員によってよく意図されていた。「狙い②」と重なる部分もあるが、これをあえて抽出して「狙い③」とする。この意図には、受講生が自らの成長を図ったり自覚したりした時、その取り組みの時間・空間的な場として大学があること（あったこと）の気づきが、「ここに居た（居る）からこそ／ここで過ごした（過ごしている）からこそ」というような帰属感の高揚をもたらす、ということが関わっていると考えられる。

以上のように、各教員の意図はおおよそ狙い①～③の3点にまとめられる。そこで次に、これら3つの狙い・意図が実際どのような形で発言に表れていたか、より詳しく表3-1～3の内容を分析し検討する。

まず「狙い①」にあたるものとして、No. A1、C1

やC3のように、教員が「必ずしも完全で立派な学生ではなかった」過去を伝える発言が挙げられる。No. B2の発言と意図も、自意識の過剰さという「未熟さを含んだ青年期の心のありよう」を提示している。「先生も学生時代にダメなところがあった」ことで、受講生が親近感を抱くことにつながる、という意図である。

「狙い②」は、No. A2やC2のように、「かつてに比べ、今この大学ではとても恵まれた教育環境にある」ことを伝えたり、No. B5やC4のように「大学で身につけて欲しいこと」を伝えたりして、受講生に大学生活に関する内省を促すという形がとられていると考えられる。

「狙い③」は、No. B4、B6やC3等のように、教員自身が悩みながら自分のあり方や成長に取り組んでいた姿を伝える発言の中に見いだされる。受講生の中には「このような悩みにぶつかるのは自分だけではないのだ」「そのようなプロセスを経て何らかの成長があるのだ」という安堵感を覚え、大学生活の中でそのような作業に取り組む動機づけを高める者もあるであろう。上回生においては、自らがその渦中にあることを自覚する者もいるかもしれない。また、「狙い③」は学生に個としての成長を直接的に「呼びかける」だけでなく、むしろ教員が個としての成長をどのように模索していたかを姿として示す（語る）という形で多く実現されている。すなわち、「狙い③」は「個としての成長の取り組みを示し、呼びかけることで、成長の場として今の大学生活への自己関与意識を高め、帰属意欲につなげる」ことであると言えるであろう。それは結果として「狙い①」と「狙い②」を内包することになっていると考えられる。

受講生の反応

ここまで、教員の対談で意図された狙いを3点にまとめたが、ではプログラムを受講した学生が、これらの発言と意図をどのように受け止めていたのかについて、意図ごとに、プログラム後に調査した質問紙の自由記述から検討を行う。

ここで取り上げるのは、『今日の授業「大学と私」を受けて、今感じていることを、以下に自由に記述してください。』との教示に従い、受講者（調査対象者）が記述した感想である。

まず、狙い①である「フランクに自身の学生時代を示し、親近感を高める」ことについて、関連する学生の感想をピックアップする。『先生たちの話を聞くの

は新鮮で楽しかった。上回生の人も先生も自分の学科の人でもっと色々な人の話を聞きたいと思った。(1回生)』、『3人の先生のお話をきけたことがよかった。大学の話とかはめったにきける話じゃないし、昔と今のちがいとかも知れてよかった(1回生)』、『教員の方達も一人一人考え方や生き方が違うのだなあと思った。(3回生)』といった感想は、教員の学生時代に関するトークが、学生には新鮮で興味深いものであったことを示す感想である。

一方で、教員に親近感をもつことについては、『先生が前で話しているとおりに、ONとOFFがはっきりした比較的フレンドリーな人が多いイメージです。生徒からするとありがたい。(3回生)』、『先生とのキョリが近いことは他の授業でも聞いていて、私たちはそれがあたり前だから気づかないだけかもしれないが、良いなと思った。もっと先生と仲良くなったり質問にいけないと将来にも役立つと思った。(2回生)』といった感想から、学生に“有益な”ものとして受け取られていることが感じられるが、一方では『とりあえず楽ではないということが改めて分かった。教員と学生の距離が近いのは初めて知った。(1回生)』のように、現実的な状況としてはまだ把握していない学生も居る。学年で言えば、やはり学年が進むにつれて、こうした距離感の認識が強くなるように思われるが、こうした“特別授業”の場だけではなく、様々な機会を通して、教員に対する親密感を上げていくよう働きかけが必要なのかもしれない。

次に、狙い②である「教員の体験を踏まえた大学・学科に関する語りかけが、受講生の大学生活の内省と帰属意識を促す」ことについて、関連する学生の感想をピックアップする。『今の私について、考えさせられた。先生の話聞いて少し前向きになれた。(1回生)』という感想は、教員の対談の狙い②にまさに対応する感想であると思われる。また、直接教員の対談に関しての言及は無いものの、『大学という存在がどういうものなのかを改めて深く考え直せたいいい機会だったなあと思いました。(2回生)』、『今は大学をとおして知ったイベントなど、今しかできないことをやっぱりもっと積極的にしていきたいと思った。(2回生)』、『あまり自分には学校が必要ないと思っていたけど、そんなことはないんだと思った。(2回生)』、『大学で行ったことはこれからの人生で何かのあしがかりになるのかもしれないし、まったく何も関係のない人生を歩むのかもしれないが大学での経験が人生の中で何かによくてできるような感じがしました。

(3 回生)』、『この大学にいて自信となにかをみつけだすことが課題なんだと思いました。(4 回生)』、といった感想は、本プログラム全体を通して、教員の対談の狙い②による効果が認められることを示している。本プログラムの主な対象は、1 回生であるが、1 回生の段階で『この大学、学科の一員であることをきちんと実感できたらいいなと感じた。(1 回生)』といった感想が示されたことは、狙い②が実現された証左であると考えることができる。一方で、4 回生の学生からは『自分の大学生活は充実していたけど、学外の事が多いので、もっと学内の行事に積極的に参加すれば良かったかな?』と思います。(4 回生)』といった“反省”的な感想が得られている。

最後に、狙い③である「個としての成長の取り組みを示し、呼びかけることで、成長の場として今の大学生活への自己関与意識を高め、帰属感につなげる」ことについて、これに関連する感想をピックアップする。『大学 2 回生になって、今後どういう風に過ごしているかと悩んでいたが、先輩方や先生方の話を聞いて今の自分がしたいことはがんばっていいと思った。後悔しないように、毎日楽しもうと思った。(2 回生)』、『大学の先生が学生時代、今の職とは違う学科で違うことを学んでいたと知り、ずっと 1 つのことを学んできたんじゃないんだなと思った。どこで、自分のやりたいことが見つかるか分からないので、今は色々なことを楽しんで、学んで頑張ろうと思った。(1 回生)』、『大学生活がとても早かったと感じた。ビデオを見ながら自分もどうだったのだろうか、といっしょに考えながら見た。先生方の大学時代の話聞いて、いままで自分が不安に感じていたことが少しかるくなった気がした。(3 回生)』、『大学の中に熱中できるものはないことに不安を感じていたが、先生方のお話を聞き安心した。(3 回生)』といった感想が認められ、大学が個としての成長の場であるという認識は狙い③の通りに伝わったのではないと思われる。さらに、直接、教員の対談に関わる言及はないものの、『自分という個性を見つけて大学生活を楽しみたい。(1 回生)』という感想は、教員達が対談を通して伝えようとしていた狙い③が、総合的な感想として残ったものであると解釈することができる。これは先にも述べたように本プログラムの実施環境として「自己の探求」という授業のうちの一コマとして実施されたこととも関連するかもしれない。一方で、学生が個としての成長を獲得することは、各々の授業の目的にかかわらず、本来大学教育課程が全体として狙うべきポイントであろう。

まとめと今後の課題

以上より、本研究では次の二点が示された。

- 1) 全学を対象とした場合、2014 年度以降に実施された帰属感高揚プログラムがそれ以前のプログラムよりもより効果的である（やる気を高める）こと。
- 2) 特に、教員の対談については効果が多面的に高まっており、これは受講生の所属する学科教員が登壇したことによる親近性の効果だと考えられること。さらに、教員の対談のプログラムとしての狙い・意図を、語りの内容から検討したところ、本プログラムにおける教員の対談の狙いは、①フランクに自身の学生時代を示すことで、受講生の教員に対する親近感を高める、②自身の体験を踏まえて、大学・学科に関して語りかけ、受講生の大学生活の内省と帰属意識を促す、③個としての成長の取り組みを示し、呼びかけることで、成長の場として今の大学生活への自己関与意識を高め、帰属感につなげる、という 3 つの内容に分類でき、それぞれの狙いに沿った教員の語りが受講者に有効に作用したと考えられることが示された。

教員の対談に関しては、2013 年度までのプログラムにおいても、ある程度は上記 3 つの狙いに沿った内容が教員らによって語られていたと思われる。それでも 2014 年度以降のプログラムにおいて、教員の対談がより効果的であったのは、親近性の高い教員が、狙い①～③に則って語る方が、より語りの効力が増すためだと解釈するのが妥当であろう。

しかし、教員の対談の効果が親近性によって増大することは、こうしたプログラムの構成について考えさせるものである。学生の側からすると、興味深いのはやはり「自分の学科の」先生や先輩なのであろうか。これは帰属感の射程とも関連するが、学生にとっては、他学科の教員や他学科の先輩は、やや遠い存在であり、帰属感を感じる対象は「大学」よりも「学科」ということなのかもしれない。このように、帰属感の射程を例えばゼミ・コース・学科・学部・大学と「伸縮」させることも考え合せつつ、最終的にプログラムの目標である帰属感高揚の対象をどの辺りに置くか検討し、プログラムの構成を考えていかねばならないであろう。

最後にもう二点、今後の課題について触れておきたい。第一に、本研究では帰属感高揚プログラムについて、特に教員の対談に関して、その狙いと効果を質的に分析したが、今回の分析と考察が妥当であるかは、尺度などを用いて調査と量的分析を行い、検証する必要がある。

第二に、プログラムの効果の持続性に関する問題が

挙げられる。例えば、大学のアドミッションポリシー等、専攻学問を学ぶことで身に付く力について考える特別な授業を実施し、その効果について検討した松本・小川（2015）は、授業直後には、大学で学ぶことの課題価値（伊田、2001）の明確な上昇が認められるが、その効果は5ヶ月後には認められなくなり、実施前のレベルに下がってしまうことを示している。本プログラムにおいても、効果の持続性について検証するため、プログラム前と直後及び数か月後、1～数年後に、帰属感がどのように変化するか、継続的な変化について調査する必要がある。あるいはプログラムを一回のみで終了するのではなく、例えば各年次に相応しい内容にプログラムを分散させ、年次毎に開催する等、プログラムの構造自体を見直し開発していくことも考えられる。

引用文献

- 古田雅明・中村紘子・香月菜々子・加藤美智子・田中優・西河正行・福島哲夫・堀洋元・向井敦子・八城馨（2012）. 新入生オリエンテーションに対する学生による評価の分析 大妻女子大学人間関係学部紀要：人間科学研究, 14, 59-70.
- 芳賀道匡・高野慶輔・羽生和紀・坂本真士（2015）. 大学間の「つながり格差」と学生の主観的ウェルビーイングのマルチレベル分析 —ソーシャル・キャピタル論から— 日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 676.
- 伊田勝憲（2001）. 課題価値評定尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, 48, 83-95.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮（2010）. 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集, 397.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮（2011）. 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発（2） 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集, 332.
- 松本明日香・小川一美（2015）. 専攻学問を学ぶことで身に付く力について考える授業経験が課題価値に及ぼす効果 日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 479.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩（2007）. 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 45-54.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩（2015）. 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発（8） 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 1126.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之（2008）. 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について（2） 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 7, 47-56.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之（2012）. 新入生オリエンテーションに関する研究（6）オリエンテーション成果が大学生生活充実度に及ぼす影響（2） 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 1134.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之（2014）. 大学への帰属感と大学生生活充実度を高める教育プログラムの開発 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 4, 15-22.

* 本研究は、平成 26 年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費の助成を受けて行なわれたものである。

Educational Program to Boost Students' Sense of Identification with their University: A Comparison of 2013–2015 Programs and Analysis of Talk of the Teachers Approach

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Akira OKUDA

Masahiro KAWAKAMI

Hiroyuki SAKATA

Yuko SAKUTA

Faculty of Liberal Arts, Department of Fashion and Beauty Sciences

Saeko KAWANO

Faculty of Health and Nutrition, Department of Health and Nutrition

Yasuyuki KAWABATA

Abstract

At our university, we developed “University and I” – a program for students from all departments to foster a greater sense of identification with the university. We have improved the program we developed in 2013 by remaking video clips and boosting familiarity with faculty through our Talk of the Teachers approach. We incorporated those improvements in the 2014 and 2015 programs. This study analyzes the effectiveness of those programs compared with that in 2013. Questionnaire results showed that the programs and Talk of the Teachers were more effective in 2014 and 2015. Faculty members’ speaking objectives in Talk of the Teachers were classified as follows: (1) by frankly sharing their own university experiences, they could increase student familiarity with their teachers; (2) their talking about university and department matters based on their own experiences encouraged student self-reflection on university life and a sense of belonging to the university; (3) by sharing their own actions as individuals, they could enhance students’ awareness of university life as a stage of personal development, thereby promoting a sense of belonging to the university. We found that when faculty with whom the students felt a sense of familiarity spoke with these intentions, the program was more effective in its aims.

Keywords: promoting university identification, Talk of the Teachers, student familiarity with faculty, university student development, university satisfaction